

## 政治を語るフレーム

乖離する有権者、政治家、メディア

稲増 一憲

東京大学出版会、2015年

写真は amazon



本を読む機会は少なくないつもりだが、ほんとうに面白い本は年に10冊もあればいいところで、厳選して読んでも、その確率はおそらく数十冊に一冊といったところだろう。

そうしたAクラスの本もこれまでは読んで終わりだったが、それでは勿体ないと考え、自分の心覚えも兼ねて、簡単にご紹介していこうと思います。

「政治を語るフレーム」は、著者・稲増氏の博士論文をベースとしたもので、その目的は冒頭に次のように書かれています。

「本書は、日本の有権者が政府の意思決定に参加するに値する知識や能力を持っているのかという問いに対して、一般有権者が政治を捉える枠組み（フレーム）に着目することでひとつの回答を試みるものである。これまでの政治科学における研究においては、一般有権者による政治の捉え方が政治的エリートの公的なディスコースとは異なることを以って、一般有権者の政治に関わる能力が欠如しているとみなされることが少なくなかった。しかし本書においては、両者による政治の捉え方の相違を前提とした上で一般有権者の視点による政治の捉え方を積極的に評価することにより、日本の有権者が政府の意思決定に参加するに値する知識や能力を持つという結論を導き出そうとする。」(pp1)

学術書なので極めて正確で慎重な言い回しですが、筆者なりに踏み込んで表現すれば、次のようになると思います。

《我々は、政治的エリート（政治家、官僚、政治学者、政治部記者など）の方が一般有権者よりも政治に参加する知識や能力があると考えてしまいがちだが、そうではない。違っているのは政治を捉えるフレームであり、2つのフレームに優劣はないのだ。》

ここには2つの仮説があります。第1の仮説は、政治的エリートと一般有権者では政治を捉えるフレームが異なるというもの、第2の仮説は、2つのフレーム間に優劣はないというものです。本書では、第1の仮説については明言され、検証されますが、第2の仮説については明言されていません。第2の仮説は、筆者が勝手に著者の気持ちを忖度したもの

です。だからといって、決して筆者の捏造ではなく、明言されてはいないものの、その存在が濃厚に感じとれるのです。

「政治を語るフレーム」の構成は次のとおりです。

## 第Ⅰ部 理論

第1章 一般有権者は政治に関わるに足る能力を持っているのか

第2章 一般有権者は政治をどう捉えているのか

第3章 政治を語るフレームをいかにして研究するか

## 第Ⅱ部 政治的エリートによる公的ディスコースと一般有権者のフレームの比較

第4章 年金争点についてのフレームの比較：2007年参院選を対象に

第5章 政治情報の入手経路がメディアと有権者におけるフレームの一致度にもたらす効果

## 第Ⅲ部 一般有権者が政治を捉えるフレームの詳細とその影響

第6章 質的面接調査による一般有権者が政治を捉えるフレームの詳細の検討

第7章 有権者が保持するフレームと政治的態度・行動の関連

第8章 政治を捉えるフレームの提示がもたらす影響の検討

終章 政治を語るフレームから何が見えるのか

論点に合わせて多彩な調査方法が採られているのも本書の特徴の一つです。実際に検証作業が行われる第4章から第8章における方法論は次のとおりです。

第4章：国会会議録と新聞報道を対象とした計量テキスト分析

第5章：JESⅢ(Japanese Election Studies Ⅲ)のデータによる多変量解析

第6章：質的面接調査（半構造化面接、対象者24名）

第7章：ランダムサンプリングによる郵送調査（対象者1200名、有効回答数399）

第8章：インターネット調査実験（本調査1414名）

各章の個々の議論は省略しますが、本書で得られた主な知見には次のようなものがあります。なお、これらは筆者の理解の範囲で要約・抜粋しているもので、不正確だったり、誤っていたりする可能性もあります。

- 政治的エリートと一般有権者で年金問題の捉え方は異なっていた。政治的エリートは、年金制度の設計、選挙戦での争点として捉えていたのに対して、一般有権者は自らの負担問題などとして捉えていた。（pp181-182）
- 憲法の争点と年金の争点を比べると、政治的エリートと一般有権者との間での捉え方の差異は、憲法よりも年金で大きかった。日常生活の経験から入手できる情報量が多いのは憲法よりも年金であるから、日常生活の経験から入手できる情報が政治的エリートと一般有権者との差異を生み出すものと考えられる。（pp183）

- 一般有権者のフレームとしては、①保守と革新のように抽象的概念に基づいて政治を捉えるフレーム、②自らの私的生活空間と政治を関連づけるフレーム（居住地域、個人の生活、仕事経験の3種がある）、③私的生活空間におけるコミュニケーションのツールとして政治を捉えるフレーム（日常会話における一つの話題として政治を捉えるということ）の3類型が明らかになった。（pp183-184）
- 政治参加と関連を持つフレームとしては、これまでは①が主に考えられていたが、②や③も有効であることが確認された。（pp184-185）

本書の結論については、次のように述べられています。

「以上見てきたように、一般有権者は日常生活における経験を通じて副産物的に政治情報を入手するとともに、自らの私的生活空間と政治を関連づけるフレームを獲得している。政治的エリートの公的ディスコースにおいて頻繁に用いられる抽象的概念に基づいて政治を捉えるフレームとは異なるものであっても、有権者がフレームを保持し情報処理を用いることは、長期的には政治参加を促進する可能性を持つといえる。したがって、政治的洗練性概念に見られるように、政治的エリートの公的なディスコースにおけるフレームとの相違を有権者が政治に関わる能力の欠如とみなすのではなく、私的生活空間と政治を関連づける一般有権者独自のフレームの民主主義社会における役割について、積極的に評価すべきであるというのが本書の結論である。」（pp185-186）

対比的に言えば、政治的エリートのフレームは抽象的・一般的・巨視的、一般有権者のフレームは具体的・個別的・微視的ということでしょう。

本書の面白さは、一にも二にも、これまで優等視されてきた政治的エリートのフレームの価値を相対化した点にあると思います。この相対化が対等関係なのか、補完関係なのかは判然としませんが、「具体的・個別的・微視的なフレームの重要性は否定しないが、少なくとも国政においては抽象的・一般的・巨視的なフレームの方が重要だろう」という声はすぐにでも聞こえてきそうです。

もちろん著者はそうした点については先刻承知で190頁以下の部分で考察していますが、本書の力点が一般有権者のフレームとその機能に置かれているので、この部分には探求する余地がまだまだ十分に残っていると思います。2つのフレームが実際の政治の中でどのような関係にあるのか。こうした点を中心にした続編を読みたいものです。

《違っているのは政治を捉えるフレームであり、2つのフレームに優劣はないのだ》という着眼は、いろいろに発展する可能性を秘めていると思われます。

意見に係る部分は、筆者個人の見解です。

橋本 武（一般財団法人日本開発構想研究所・研究主幹）